

て死者の財産を現在の後継者が継承することの意。さらに当時の進化論生物学では「祖先の類型への回帰」すなわち先祖帰り atavism をつよく想起させる術語だった。こうした操作によって岡倉は、道教の「道」の思想を仏教的な輪廻転生にともなう生々流転へと、より近いものと理解できるような下地を整えていた。それを受けたのが次節：

《「道」とは「小径」というよりむしろ、「通過のうち」にある。それは宇宙的な変化の精髓 the spirit of Cosmic Change であり、それは自らのうえに回帰して return upon itself あらたな形を生む、永遠の成長である。それは like the dragon 龍の如く自らのうえに蟄居を巻く recoils upon itself (…)' 「道」とは偉大なる変遷 the Great Transition として語られよう》。

ここで「偉大なる変遷」とはギリシア語でいう αἰών アイオン「大宇宙年」のことに他なるまい。それを見落とさなかったのが、岡倉の爽子とすら噂された、パリ滞在中の九鬼周造だった。1928年ポンティニーでの九鬼の講演「東洋における時間の観念と時間上の反復」は、岡倉の「道」解釈の延長上で展開された、それ自体ひとつの輪廻転生 Wiederkehr だった。

その元をなすケイラスの『道徳経』に下訳を提供したのは、シカゴでケイラスの下に滞在中の貞太郎こと、将来の鈴木大拙。近代東西思想交流史はここから再考を要請される。ハイテガーもベンヤミンも、原典あるいはシュタインドルフによる独訳(1922)で、『茶の本』に触れ得た筈。Unterwegs や Passagen の隠れた一発想源がここに想定できることとなるからだ。

※2015年10月5日、ハイデルベルク大学「国境を越える神智学」席上での筆者の発言。

連載誌

The Way is in the Passage rather than the Path.
『茶の本』はいかにポール・ケイラス訳『道徳経』の「道」を読み替えたか

稲賀繁美
国際日本文化研究センター研究員・
総合研究大学院大学教授

「道」とは「小径」というよりむしろ、「通過のうち」にある。天心・岡倉寛三は英文著作『茶の本』(1906)でそのように述べる。この部分で岡倉はポール・ケイラスによる英訳『道徳経』

(1898)の助けを得たと注記している。だが今日にいたるまで、どうやら誰ひとりとしてこのOpen Court版英訳と、岡倉の「引用」とを、きちんと読み比べてはこなかったようだ。

両者を比べてみると、「道」の釈義をめぐる、岡倉はケイラス訳の語彙の多くを替えていることが判明する。まずケイラス訳を見よう。How calm [寂] it is! How incorporeal [寥]! (….) Its character is defined as Reason [道]. When obliged to give a name, I call it Great [大]. The Great I call the Evasive [逝]. The Evasive I call the Distant [遠]. The Distant I call the Returning [反].

対応する箇所の岡倉の原文は以下のとおり。How silent [寂]! How solitary [寥]. (….) I do not know its name and so call it the path [道]. With reluctance, I call it the Infinite [大]. Infinity is the Fleeting [逝], the Fleeting is the Vanishing [遠], the Vanishing is the Reverting [反]. 原文は『道徳経』第25章。ケイラスの訳本が岡倉に裨益したのは、そこに原文の漢字と語釈が列挙されていたからだ。

岡倉の意図は明白だろう。Evasive [逝] は Fleeting に、Distant [遠] は Vanishing に、Returning [反] は Reverting に置換されている。ケイラス訳がいかにも直訳調だったのに対して、岡倉はより一貫性のあるイメージを一般読者に伝達しようと腐心している。Evasive のように英語では否定的な含意は取り除き、より宇宙論的な次元を想起させる英語の語彙が選ばれる。Reverting は「原初の状態に戻る」の意味で、法律用語の reversion は遺産相続におい